山桝大夫

岩墩實記

十三
十四

へ13
3304
7

3304
7

魏譯書　繪本
倭軍書　書キ本
唐軍書
隨筆物　滑稽物
國々名所
近世戰爭書類

右之外數品古雅珍奇を新奉販也

書物賣捌所　東京牛込細工町　誠光堂　池田屋清吉

池袋

山城實紀奉行考

目錄

一　岩槻家盤屋敷の事
　　村長屋敷の事

大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部

東京　牛込區　貸本所　池田屋清吉

池袋

宮殿寶祝奉り拵え

宮殿寶盤高遷續の事

宮殿寶盤高遷「村長苔地貞子命」の事

さるほどに金の屋たち中討れ

ーーとまことこそ関吾悪八

郎中大なる怒りの色をあらわし

毛髪甲をつくぬき例の涙の

様をつくりとうちかり俵を
鬼神のいりをはらひ
ぶり立て敵を中天よりち
とけ飛ぶ雲をおきて目た
く冥よりかとうちうち
鉄丸をつかみとるさんと彩
んの他ありとも鎧八領
て苦の球をれば立矢をるこの

すりこれをとらんてはつ鎧
しまき敵のつるとのしうふとん鎧
をとらけよせあらく西八郎を
ミちんよあさんとこの人をう
よ十三束をつるきりきりとり鎧
ちぶりひやうと射るその矢
はやまさに西八郎の甲
よぐさと立て鬼神をあ

さてもせきやの悪八郎ありけるが
鎧をあれば馬よりふるひ
まりさらさらと鳴る
をはさりやあらうと矢さけび
しゝゝゝとしゝゝゝるるより鏃
ぶり首をそんとぶるる悪
八郎大の眼をぶひらき手
をさしのべゝゝ鎧中を引

ぬきとりゝゝ引抜
てゝ鎧中よりる
敵を小鎧中ゝ引せてあ
たりぶ首をうちおとし岩
城ゝ次郎ゝ関谷悪八郎
を引とりゝゝ鎧ゝ
れて跳起ちゝゝと立ち
ゝりこそよりあそちまち

平相国あそんの武威をあらひ
逆徒をうちほろぼし
鎮西のよろこびたちまちに
聞こゆをきゝ
四條建久七年より
はじめて九年まで平相国あそん
威をふるはせ給ふ
きゝ
一紙の

宣旨をきこえうけ給ふ
たゞしこれ清盛
法住寺殿をうちこめ
捧情たちまちにうけて
誓の恥辱をとゝぎ
四條院
平相国あそん
奉院

宣旨の

陽堂これをよろこびの上こえよ
て徒行の男女を引あひた
ひらる能出光い所地をたゆり
所にて岩城の あんへとこの
三年ぶ冒る新兵の出羽廣
大ありと奉所の出羽守命
じたひりれが乃兵衛源
おりして男女を制一寺り

我國日吉ノ十信あり一奥州
さして攻ひのうかくて徒行
万年をとあへいをたゆ
りりるされで岩城掃部
乃兵衛と元年男化大兵よ
して出羽ノ新兵衛も
家臣ようして兵をひりれを
ものれて西田大ノ浦まり出さ

うひあひらにとりてのたのしみ
時政にハ男子あまた有 舎弟
中にも義時を以て家を
つがしめ 宗時ち陸奥守 時政
と号せり 父 時政を そめの
英雄のしるし 武を振ひ
ければ 奥州五十四郡 領して
ぶへ いよいよ 治まり 安堵の

名をあらはしけるのあるし能る
より 正治元年正月十三日 鎌倉
将軍 源三位 頼朝公 薨し
給ひしかるよりしろく 若君
頼家公 天下の武将を 任ぜられ
かくの時 時政 義時むねとして 政
やしよの時 嫡子 泰時へ 家督
の難び 時房よりしく おさめ 道

寅い入たしてて月毎と呉〻
りる左多多の智左道中智左積
し武雷すり必ずたるひれ
ず岩堆家の武威密てんあり
左多道て雷一女はりて男子ハ
左陰糸西道と呉せり女子ハ
岩形姫と呼ばるる左道うて
武雷をらのこれる巧りて

雷敬の主と雷ぐ出されり
まもなく家屋材器富左中重
形ぐ雷猫ありて弾して花
形姫を雷をう卯ぐ家の書よ
ありりれが材器ハ日ハ乃
の威光十信して槍威なる
陰人ちぶりぐやうハそ
れりまく至形武雷す

惟ることれより宮城郡の
裏へとうちあり
宮城郡を代々武雷より宮
たりしかれども郡屋の中なも
雷士なりとその中なも
大村次郎信俊村長雷を
宮郡とする程郡衙を宮城
を宮城郡の三大郡と号し

いつれも大郡なり武雷
のおもなるものなり
村長を元郡雷中といひ
雷を中と名のりしいろは
子細ことしかるよ宮城
郡の国を禁天が嶽といふ処
ひろくて雷塩ある
ぶやく宮城特をこのみ山中ハ

[illegible]
ありける年の暮例のごと
うの山より見けづりて特に雪
しらるる俄に山風さびし
く吹来り樹々の面
さらんと降りいづる霰雲震
雷雷鳴きあじく山岳
幽谷をも雪のごとくさらば

しあんとどいりかわらうあり
雪中にまぐれ面をたるうん
と物ふるひ入りて体身長
しとしとしみたちまち面の
ぐきよ雪てかたの上すす
雪高かくり火の玉四方くさん
乱舞をとるるう少年の上へ
とり来られる古本のごとき

手をさし出すと、はらをかきり
ぬつゝと屋敷の
よりわが三中いんぼくとして
たゞ四めきの手をきり
落せども怪異手をきり落
されども雲中うるれつり
三中い中天より地ゐどき
して例と落ちるの手を

つゝとゝる鱗のごとくにし
て空の彼方へ横へくるり云と
し雲の手をりつるの
ぬんと出ちゝ山ゝゝ雲
雲堀し高通の
ゝゝゝれを
飛人のおとぶ
て まより雲中とめきれ

より代年ニ成り古今
集のはつかのあり と読人の
おもひつまいよりの歌
ことりはる信しるこの御
器ぐ家器をくふくたげ
ぬるよ出雲御国の風ふく
櫛玉天皇の玉ふ兵を
筑紫に祝まつり子孫をして

年の御をたまりよ鹿の大き
さ任ぜられてより王兵を出て
たまひ朱雀の院の四字の
第二のさ子張さ府年年武
殿の男おなる殿下給ふ
おなる郡より越り方陸方
国をうたびとりつるよ関東
小ケ国を切りたまふ下給ふ特殊

鄙石年のはしを
こゝ年親まと名のりたるつ
みよ貞盛秀ひらが為よやぶ
られ是ことこゝ義
ゆしこそよ初めて強せこゝこそ
為義がこの村岡次郎忠頼が
謀を聞くこゝ陸奥守任じ
太傅こゝ移門ぶ源義ふり

そのまよ上洛ま出ま彦そのこ千
葉介彦移ま彦孫千葉ま彦
源ぶこの太郎次郎源彦と名
のり寛永の比今の武蔵の
太郎出しあり系図をこるよ
太郎このよ太郎次郎源彦
より出しこり移門ぶ友延の彦
ぶ源と太郎こそれこゝ他国へ逃

きりしたんの法を信仰
するものい伝説と名のりある
この村長さき
門ぶ信仰村長
ものしるし千年
おもいを藤あり先年
今屋敷中屋敷
屋のきこくなりし武
小松城の城の付がんうれが武蔵
村長兵衛ハ

なるるをあしてをあしてをあの家
信をおせーよりの宗体家の三大
老となりがめられ家光の代
よりこうもで家忠の子孫あり
宗体おるい先祖より日蓮宗
かめくりの形もの方よ子孫
るるいにおしまひ手あり
大悪を家光の世

知をかくしもちれと自至のこゝ
てをなりて時分を不合もる
い実ゝ知るゝ仙中あり
きれて考道い武蔵の大
拍子あり西国球界をめぐりける
ゆゝしうつゝとして敗れ
りける中ゝ考道玄蔵と
知よひ西国巡業智をめぐられ

家ちゝ有ゝ家まりのり
ある考法秘西道い父のめぐり
ゝ考つゝ考法を学し兵を
ゆりれをたゝひりれが仙中
ゝふりゝ豊ゝりおゝまり法
人考法のあり法を志一ぬ
拍ゝ父の考法死去ゝし
際ゝ玉政ゝおとゝ妹聖の

材長書きに中よ世中の段ごとを
まうせ書きて能書に書かせう
おぼれ取りて山屋のいさ色を
明しに世中の乞女をなりけ
め日歩祇園社にすみけりの
雪ちゆいと世間に慣び
京都へ入をつるに肩目よ
き物を拾ひ人めしがく

これを書くに献じ侍べ
ぬ所のようこそ山たちあ
れば材長をこそ山屋とお
もひ寄るもたれ
ちらるへ材長をの物よ
ぶものを二条に用ひ暴
をとらく代くの山屋を
けるんまよ逆てをとる

ひろう言葉の白髪の
付て苔花とさいてこゝ
ゆりるふる白やさしくも
まるまると海岸の面をかゝ
とるごとくしてこハの花
の驚ふがるる人をうごろ
ちるも如くめされて
晴の色もかりうるゞ銭中

村長らの苔花をかゝ
意一とし此の接感まる
せて西方公よりの陽ろ
うけ言ますちさんと世一よ
苔花をてを無の時のしく
村長ぶ公中ろ遠ぬる
き程して公ろ色ぜばかる
ものくるを汚さん言を

ふるくあるものあるを夜
鉢をたゝのぶ出はるとりの聞さ
ゑをたゝけ共もあるくあるし
たゝ[illegible]れあれ今苔の花が
聞とて[illegible]のうくゝ蜜をなぎ
きてし設のとりあり也
べき点あるとゝ云るゝ人ゝ
仮をあるさんとりなる

この苔の花が雪中に
遅くあるを
花をあるゝ所を
もゝ[illegible]ゝ所ゝ
うあるゝ所ゝ
ゝあるゝ所ゝ
ひゝ[illegible]ゝ
ゝい出仕をゝ

あとをしたひて
の方にうつる
うしろと山
あり又ちゝ
余のものども
うしろ
をきりた
る敵をうち
あまぐでうち
まてうりうる
このみさほを
しりぞろの
成敗せりと
こびて岩城
臣らうち
面目いと

敵
家の滅亡
引こもる
ひきけ
ひろけ
ひろ
ひ
げ
ぎり
村長は
ものごと
ひりても
ありまし
ゆえ
さだ
さいぐん
忠
しげより
顧

まもりのためありける西には
若君さま姫君さまへまし
ませどもいづれも御年あり也
ればぜ非なきことにきこえたまひたのもし
にはる隣重照まて大事に
やよ上なるは西殿ぞかりょてハ
にも風もうきくかもぞ獅子の
捨鐘あそびし楽しみある

づしとまてたえなる心しも妙生
のなるあれぞ四方のなりきこし
うらうらとおふるよ霞のどけき
ころあれぞ此うへもなき
あかめあまんとて城より西
の方より小山田とりつるまであり
て千本の桜盛りなれば
御心へまかしのきこえよかつらし

[illegible]の[illegible]の貧女をうるあひ
[illegible]をもつて[illegible]びたるむね[illegible]
[illegible]の[illegible]もうもち
[illegible]に一つ[illegible]ひり
[illegible]に[illegible]一朝[illegible]千金を
[illegible]命をもつてする[illegible]
びとい[illegible]ものもひとりあるる
岩城実紀奏[illegible]

岩城実紀奏[illegible]四

目録

一 村長[illegible]を[illegible]て[illegible]家を
奪ふ事
[illegible]村[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]事

山城実記巻之拾四

村長ら[illegible]を[illegible]て[illegible]を奪ふ事

矢[illegible]村[illegible]の[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]事

[illegible]も[illegible]を[illegible]で[illegible]日

の[illegible]もう[illegible]ち[illegible]れ[illegible]

[illegible]ぞ[illegible]

てたてまつしるすあれがはの
ゆんでまつるかの日のものの
あれがうとぐとぐ物をぞ
つるやうまとけ物をのぐし
ゐ嶽が兵とりて持ちて出
家ありこれをぞ家にのこす
ろあれがしとて形ばかりと
しる物のものの手の

よれあり手のあれがこのものの
中ゐまで免ちてまつる物ぞ
ぐと示しゐ今も家よりの
家屋のもとの時物を
ゐぐしのものもの
りおのの物の中ゐ日
をくし大風よ雨もぐる
あぐ雨あぐ手をひられ

あぐる手物よりこの海辺
の風ざ[illegible]
このうくもちもの楽しと
ゆうべとはゆるまゆせのかい
脇差のそもし哭す脇差
百の銭こうかのうるよひとき
命ともちぐでまちゆく事
りあるいはうしかれりうしひ

ちり掛し井に少ばきまちまち
のうけうる事あるかあのもち
目はうてるようしうぐひ
引くうるうしひ中と対る
ようかをつぐちをちぐぼて
西遠云の間ぐさぐさぐる
り対つぬうぬ何ようして
ようるつぐはは月と事のさけび

のしそのまま急いで逃げうり
ありし供の人々大勢集まり
うろたへあぐまれしものよ
逃げあとの方よりきりり
かつてきらびやかなる宮殿
のうちあれどいづくへ逃げうせ
たんそうそうの行方知れざり
ありし女どもはさきよりも
をひやしてうろたへつつ泣き
さいまぎれうろたへ供のみなく
あくりうちんの乱れをあの
物ものせまいまいも鉄をさし
てうろうろ出て長の歌を
いかもはてられぬはりさは
あり村長至乱れうろたへ
あどろきる体よりて泣

命ゆるよろこびあらん事葉
をうさりしくいかやう何さま
猟人への信心を矢うみい者す
うふみをあつみくるものぞも
が仕業うてやなりん何ゆえも
せよ家をうとけく陰義をべ
しとのくしりさいけがちば
次第ことわりを御のくゆりのふ

うた神をちぎり何年者を
やをうちもせんと思ひそのも
のが逆恩をうるたく捨てやま
神りに遠の事をおそれも
さわがとて百も玉家あく者
していうちのへうふべ者を
世捨ようて玉改をあさん
事行要ちりとて財宝を

風見さみしくはりさ風の
寒さたのもしく思ひ
やとつ云いひしうち雪ぶ
雨のものどもの雨体ばく
云分もきつきるものあしはく
材長ぶいらく何らの事いさて
をきまり言葉のうあまらう
を業出り書るづしとて那の
ぢくいつきまきの親戚もうの
ちひ情事ホのこるうくあく去
きみ百ケ日もうたしうが諸屋
おのく陣屋のうくみうく書
年方家よりのみ若君遠
まを世つぎよ那ひ出
ぢくとて海会の珍年家
方村次郎伝御村長屋中

至新あんへりうと
如ゝ村長ぶうさうい物語
職へ給くの紙宝をもりけう
そうりびうとゝくしまあれ
ぞ母こゝあもとゝかゝ
村長ゝ今倅して紙年の逸
まれ大宝のうしまゝ
あゝ三ぶ妹年のうゆあれば

村長雷市郎宝政をそうをと
ゝうゝ逸まれ職人の信
大家の笠あゝ西一中へ
しと信ずうゝ村ゝ中ま
ゝありゝゝのゝいをゝ政
逸ゝおりくゝのいうとも陸
方あゝ扇をゝゝ功法
せり村長ゝおりお信ゝ岩

城家を押領し、知行陸奥
守と名のり、百姓より蒙
恩をうけられ、所領をもつて
家業の専を勤め、末の
世までひさしきはどの敵勢
聖りうしをうつまうしひ
く、蒙恩いはりてもあまさず
でうさされども蒙恩はつてい

出火のさうでうはつ
つみとうばつきうをおもく
ども方村ぶ神位はなはだ荒ど
ていいうぶありとかく毒殺よ
ものしとひきそうよ逃をう
どひうるおうをつくをたくを
ありうをつ方村治申領地を
方領金銭のことぶ侍ひおりう

るごとのあるべのこと聞えがあるまじ
きとてとてとてとてとく笑ふ事
つきうしあひたるべきこと
ことなれば那てい踏て
きうしあひのみるあづし
つづくつもるうしろ侍中て
ちのき時分をまつて通
路を踏しうしの後のあをを
ん
を
聞
て
坊
を
見
や
と
も
あ
ひ
あ
ち
と
村
長
ぶ
他
出
を
う
ひ
る
ひ
め
ぶ
し
き
出
と
ま
べ
き
こ
と
す
男
子
あ
へ
あ
り
ま
ぶ
こ
の
ゐ
ば
ゐ
ま
と
ま
あ
へ
さ
せ
あ
れ
ば
い
よ
〳〵
高
水
を
あ
む
ん
地
し
て

姫君のめしつかひ小萩とて
いとゝ中ふかくなりて
時雨をまちもとめるなる時の空
姫君若君十五歳もろともに
いざちひちはぶちぶちなれど
雑色の虫つゝふくさ
しも思ひつゝをつれて
清代の家の子の若殿の
をのたもとのびやうの塚中
を立いで家のうしろ形いかま
て若君を殺害して若人
の陸奥をめぐらさんとあも
ひ長もれそのちはの寺清
家屋をあれたで容易さたり
ぐ〳〵一味のものどもくま
〳〵あつまりあつまりまうへ

きぐ〻ちかけ義経をたづさへ
船出せんと海路はるかに
漕出しそうおどろきもしそう
逃〻して後代までのうれい
ありいそぎ出かけうちさ
ろはづしうれひさとひの根
を引りのちまきしりと記
さの中に弟を引かへ

ゆんで物りうる太村さん
いそぎとらくぐも見よいを只人
引つれし事ありがいそぐと
されどもちろうぞ引
六里も進とりとあるが如
ようしろの方ら馬けあり
あびさぐ〻〻写ちぐ〻〻追
んさも進ちぐ〻〻ち村伝撥是

をんなどもとそもものぐるひめいとこ
と小姓世りむ世うひまを急あり
ちんぐ古三郎が出仕しい出仕
きちがをのぐれよ城番のくる
三郎十郎三郎たるぬ保とたぐまきく
それぐしが名をつくたのむ
ぐし世うたのもしき侍ぞと
情ゆの金をうり出してう

たしそれぐいこの殿まう陣
鉄をぐきやとくいそげと
三郎をいぐちて迫とやりる
捉えんうとの宮名をかだて
おそりたカぬまうぐしく
ものちうけうとうり古三郎をきか
き家ぐいゆ殿をたどるん
地してたまろひとう

あちこちのあいだやうありまする
まことのありかたもはぶせばら
材長ぐ卿宮の開口や孫たちの
時の毒を上てこせまり
長長をうたひうたひいげくく
ゆんとしたりやきみやうす医
まれどのをうたたべくとそで
りれが伝授うふりくとうち鶴

材長の遠城うら長をたうり
玉をうたひ今まさ長長を
鶴長してまりくく岩城
の家を押所せんとこもあん
しぐそのの遠てんさちうびた
の家そして上の間長奇怪
あり遅ぞけやりとて立うれが
小孫をたのいうりをあーちんで

殺を信長とゝるおそるべきや
天孫くだりのより家命を
かゝり出り玉をのみくちあん
じたるその陰とねぶぎや正長
ぶ長をくしあるをくしあるす
あんじそのふ將をもりそく
強者ふ御をあさんとあん
じぶ白長をくそれぐし

をのりくしくだいくさのよ
ものどの長玉花をうちそれ
よとあるおせもむりとあり
うくをうを修こんあきつれて
切りくりくりを屋くをへき
りくをはふ強きたひさいうり
をおーくりくくくくくちと
れくと武百姓こんへ切先をせくへ

くるしうあるをとりて切りおと
そをはりまあいこそうの最後の
ごとくあり目をたてゝ三角
ゐたんきり伽羅小孫太
下郎ゝゝ近よりてとらふ
まじくこそ先さ射それと
よそをれれど那れ矢うの射出を
事面よりもはしたけどく古村

次第に牙中り矢を射さてらる
事箕の毛のごとく切りけて赤
西南北を切てまくれがごと
ゝ長弟のありさまあるく
進へ大勢おりとくどもきへ
も先へきて武事はさいぶ所
きりのたゝひさ対長が云
ものをひ賀ひ死んあびたび

くに信濃の手落石すりの
ふざれが勢力をつきて大力を
拔なつまぶ立きみす
ゝ死しとりとり四人
その撰をあしまざいを
小勝きて大村が力強す義
きをとゞいれ死しをきぶ
ばしくひとをとを

和さもせんれどもかしらうこぎ
ちさらうぎれかこ〳〵近寄
寺の先きまでつけて大石を
まろばしにでくたとれしかも
大ゆきはらうあげのまうり
されどもそのまゝはりとれば
やり〳〵銭の首をうって
こうぎちゝを引とつく

王小將をありうけうと沼を
ちらこらこらあり山ゆけどの村
ぶ可銭の首ちうちどくしゆ
ゆくつあるこ沼ひつうだこう
あるて古村を捉こんの首
うりうく稼ぎまあて
刀うこせこうこうとうふ
もはまりあり毎年

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山中の迷霧のあらしの
為人の命のかぎりあるこそ
限の哀なれ
まりしかと公やまもる
もろ〳〵人間をらうの上
世人驚ぶ中うくれ藤乃
夜のふけ月と笠を被
をきのきぬ藤さぐる

池清

雲〳〵空めまぶ世の中乃
百鳥囀霧の晴さと月乃
はてぬ夜乃夢なり

池清

山内侯家記書 指四号 池清